

北陸街道魚津宿 ～～拠点であるがゆえに戦乱や騒動が渦巻いた歴史の町

200921to

1. はじめに

県東部域(新川域)の北陸街道のうち、神通川から黒部川の間には、東岩瀬、水橋、滑川、魚津、三日市の5宿場がある。東岩瀬は海運業の町であるが、他の宿場町では漁業が中心である。とりわけ新川地域の代表地が魚津であり、中世には越後勢の侵攻により拠点の町が山間から沿岸に移り、近代には民衆の抗議運動が起きるという、激動の歴史を持っている。ここでは、そうした魚津宿場のドラマを深堀し論述する。

2. 魚津の町

2.1 魚津の概要

(1)概要

魚津は、1862年(明治5年)から3年半、新川県の県庁所在地となった新川最大の町であり、漁業を主な生業としている。

魚津一帯は片貝川の扇状地である。町は扇状端部沿いでき、街道は沿岸部を通っている。町の中心は魚津城であり、その近くには本陣跡が公園となっている。またそばには越中米騒動の米蔵が現存している。

魚津の風物風土の主なものを列挙する。

- ・自然観光資源：蜃気楼、埋没林
- ・生業：漁業、リンゴ、山林
- ・歴史：魚津城、松倉城、松倉金山、

(2)生業

・漁業：富山湾が結構深いこともあって、沿岸漁業も盛んである。特に新川郡沿岸は県西部に比して水深が深く、海流が沿岸近くまで流れるために、広大な漁場を前に沿岸各域にて漁業の街が栄えている。

・農業：扇状地平野はもともと水持ちよくないが、山地の有機土の堆積や水田用灌漑用水の発達で耕地が可能となっている。魚津の場合、扇央部では野菜や果物の栽培が盛んである。例えば魚津はリンゴ栽培が適している。

(3)植生、樹木

一般に沿岸部では砂地のために、樹木としては松が適しており、浜黒崎は松林として見事である。しかし、魚津の場合、扇状先端が沿岸近くまで達しているので、松は育たず、杉が主となる。魚津埋没林も杉である。

2.2 魚津の町の誕生

(1)古代

・魚津は片貝川が作り上げた扇状地である。片貝川は繩文期には現在の港付近を流れているが、時代が下つて東側に流路を順次変え、今は黒部との市境に落ち着

いた。かつての流路は干し上がり、洪水の危険性は以前よりも低くなり、人が住むようになったようだ。

- ・漁業で営む町が沿岸部にうまれ、いつしか沿岸域の各町を結ぶ交易路が機能していく。

(2)中世

南北朝の頃には魚津の南奥の山に松倉城が築かれ、近くに松倉金銀鉱山もあって、室町の頃には麓の鹿熊が城下町として大いに栄えていた。しかし、城主椎名氏が上杉勢に攻められて敗走してからは、城下町機能が少しづつ今の魚津に移され、前田氏の支配下になってからは完全に魚津へ遷町となった。(3章にも記)

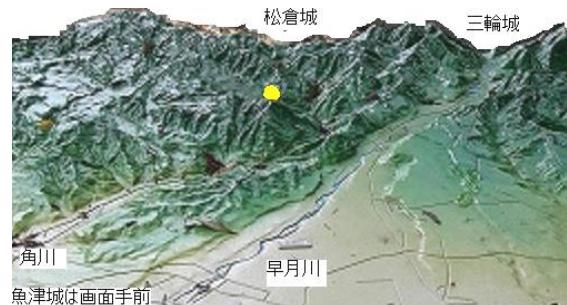


図1 松倉城とその周辺¹⁾

松倉山(鹿熊山)の山麓に鹿熊の城下町

(3)魚津はその昔、小津(おづ)とよばれていた。1595年には、魚が集まるところという意味づけで魚津と呼ばれるようになった。今からいえば、小津が「うおづ」になまって魚津になったといつてもいいのではなかろうか。

2.3 街道

中世では多少内陸に入ったルートと山ルートの二種があった。(後出するが)魚津山麓部に位置する松倉(鹿熊)が当時、東部域の政治経済の中心地であったためである。山ルート(図2)は西から東の順に、…大浦、鹿熊、東城、池尻、嘉例沢、下立、舟見、…である。なお、近世に入って街道は沿岸ルートとなつた。

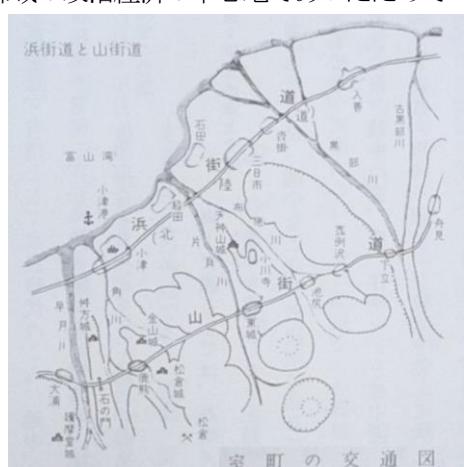


図2 室町時代の交通図²⁾

3. 戦乱

魚津での戦乱は、遠く南北朝の頃からといわれており、そのころに松倉城や小津城(魚津城)が築かれたといわれている。

戦国期になってからは、松倉城主は越中守護代についていた椎名氏(守護大名畠山氏の家臣)である。

越中では東の椎名氏と西の神保氏との争いの他に、越後の長尾氏らとも激しく争っていた。1500年初頭になると、上杉(長尾)勢は越中に侵攻し、砺波の増山城まで進撃していた。その後、上杉(謙信)は上洛のために越中を1553年と1559年の二回も通過したこともあった。

1570年には上杉勢が城主椎名氏の松倉城を落とし、松倉城は謙信の家臣河田長親が城主となった。それ以後、長親の後は、松倉城に佐々成政が入り、1595年に前田利家の属城となった。

4. 街道、本陣

・近世になり、街道としては、内陸ルートよりも沿岸ルートが賑わうようになってきた。沿岸ルートの拠点は魚津城であり、城を中心町が時代と共に整備された(図3)。城が街道を遮るように陣取っているのは、城がつくられた後に街道が城を迂回するように整備されたのであろう。

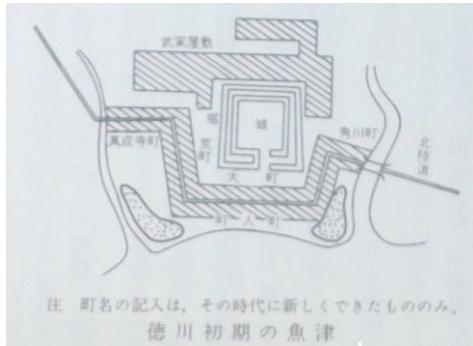


図3 魚津城と北陸街道²⁾

・本陣は大町にあった。現在は大町公園に本陣跡の看板が設置されている(写真1)。近くには、米騒動の時の米蔵が現存している。



写真1 本陣跡

5. 越中米騒動

(1)概要: 富山においては明治期には、米商人が安い富山米を買い占め、県外で高く売って巨利を得ていた。

1918年(大正7年)、政府のシベリア出兵を機にコメの投機的買い占めが始まり、米価が高騰した。日頃の米価高騰に苦しめられていた新川の民衆のうち、魚津

の主婦たちが港に停泊の米運搬船へのコメ積み出しを阻止した。これがたちまちのうちに全国に知れわたり、各地で民衆が蜂起したが、軍隊によりすべての騒動が鎮圧された。

(2)発祥地論議: 米騒動については、そもそも発祥は東水橋であり、その後には滑川や魚津にも勃発。魚津では騒動の参加者が多く、かつ新川隨一の町であったことに加えて、当時の米蔵(写真2)が現存していたこともあり、発祥の地は魚津とされている。



写真2 米騒動、現存の米蔵

6. 弥生期の地形と植生、魚津埋没林から

・1930年(昭和5年)、魚津港一体の地中から見つかった約3000~1300年前の原生林跡である。約200株の大量の立木の状態の木の根っこで樹齢500年以上と推定される巨木もあった。

・扇状地上の森林について。扇状地端部では湧水が豊富であるので、広葉樹が混在する杉林の原生林が生息する。また、土壌が砂礫のため樹木は水平にしか根を張れない。(写真3) 河川との関係では、原生林は片貝川の土砂堆積で埋まり、(腐らず)現存した理由は海底湧水(片貝川伏流水)のおかげである。



写真3 埋没林

7. おわりに

北陸街道魚津宿について、古代から近代初期までの町の成長物語として述べてみた。街道の遺構がないだけに、地形地質や社会運動の面からのアプローチが面白味を増したと思っている。

参考・引用文献

1)松倉城のHP 2)魚津市史(中世から近世)、魚津市

謝辞 米騒動や埋没林については、博物館の方々にお世話になりました。期して謝意を表します。